

英米の俗信 (4)

小泉 直

外国語教育講座

The Superstitions of Britain and the United States (4)

Naoshi KOIZUMI

Department of Foreign Languages, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

はじめに

本稿は、英米に古くから伝わる俗信の起源と内容を明らかにすることを目的とする研究の一部を成すものである。これまでに小泉(2012)では「日用品」、小泉(2013)では「身体」と「数字」、小泉(2014)では「行為・生理現象」、「色」、「天体」に関する俗信について解説した。本稿では、新たに「人生」および「左側・右側と太陽回り、時計回り」にまつわる俗信を取り上げる。

1. 人生

1.1 年齢 (Age)

イギリスの多くの地域で女性が自分の年齢を明らかにすることは縁起が悪いと信じられている。この言い伝えは何かを数えると悪霊に狙われやすいという考えに基づいている。しかし、この言い伝えに抵触することなく、女性の年齢を知る方法が存在する。それは、女性の頭から毛を1本手に入れ、それを金の指輪に結びつけてガラスのタンブラーの中に吊るし、振動するのを待つというものである。吊るした指輪は女性の年齢の数だけタンブラーの内側を打つという。

1.2 赤ん坊 (Baby)

スコットランドでは、誕生の時に赤ん坊を邪眼¹から守るため、戸口の敷居の下にナイフを置くべきであると言われている。

アイルランドでは、赤ん坊に唾を吐くと幸運がもたらされると信じられている。

逆子の赤ん坊は、生まれてから数時間以内に足をベイリーフ(乾燥させた月桂樹の葉)で擦らないと大人になるまでに事故で足が不自由になると言われている。しかし、足が不自由になった子供は筋肉痛を治す力を持つとされる。

赤ん坊は6か月が過ぎるまで鏡で自分の姿を見ては

ならない。見ると、1年も経たないうちに、くる病になるか死んでしまう。

赤ん坊の爪は1歳になるまでハサミで切ってはならない。切ると、大きくなって泥棒になる。ただし、歯で噛み切ってあげるならば幸運がもたらされる。

歯が生えて生まれてくる赤ん坊は利己的である。

手を開いて生まれてきたら、寛大な人になる。

赤ん坊が最初に左手で物をつかんだら、人生で運に恵まれることはない。

病院から連れてきたら、最初に家の上の方に連れて行くといい。この言い伝えは、最初の旅が下の方から始まると人生で前進することが困難になるという考えに基づいている。

新生児は体重を量ってはならない。なぜなら、赤ん坊は神からの贈り物であるので、検査すること自体が神に対する侮辱となるからである。

母親は使い終わった赤ん坊の服をすべて他人にあげてしまわない方がよい。あげてしまうと、好むと好まざるとに係わりなく、近いうちにまた服が必要となる。

初めて授乳する時は左側で抱いた方がよい。さもないと赤ん坊が左利きになる。

早春に離乳した赤ん坊は若白髪になりやすい。

禿げた赤ん坊は大きくなると素晴らしい学者になる。

赤ん坊に黒い服を着せるのは短命になるので縁起が悪い。

アメリカ合衆国では、古いおむつを赤ん坊に当ててはならないと言われている。当てると、大きくなってから泥棒になると警告される。アメリカ合衆国では、また、空中に放られた赤ん坊は大きくなると馬鹿になると信じられている。

イギリスでは、新生児を暖炉で排尿させると行儀のよい子になると言われている。

1.3 洗礼 (Baptism)

子供は妖精や悪霊にさらされるので、生まれたらできるだけ早く洗礼を受けることが望ましい。しかし、洗礼を受ける前の子供は、父親が着ていた服を掛けてあげれば、しばらくの間、悪魔から守ることができる。また、揺りかごに薬草、パン、塩、金属片をぶらさげても同様の効果が期待できる。

イングランド北部地方では、子供は洗礼を受けるまであまり成長しないと言われている。また、新しい教会で最初に洗礼を受ける子供になるのは凶兆であるとされる。この言い伝えは、安定した構造が保証されるように教会の土台の下に子供が男性を埋めていた古い風習に由来する。

洗礼は日曜日に受けるのが最もよい。洗礼を受ける子供には白い服を着せるべきである。赤いリボン是不吉なので避けた方がよい。

洗礼は埋葬の後で行ってはならない。むしろ、幸せな生活を保証するために結婚式の後で行うべきである。

教会の鐘は力一杯鳴らさなければならない。そうしないと、子供の耳が不自由になるか音痴になる。

子供が司祭よりも早く洗礼盤に到着したら、その子供には千里眼が授かる。しかし、司祭が式辞を朗読する時に誤りを犯したら、子供がどもるようになる。

2人の子供を同じ水で洗礼してはならない。1人目が水分を使い切り、水の中にその罪を残すことになるからである。イングランドの北部地方と西部地方では、男の子と女の子を同時に洗礼盤に連れて来て、女の子から先に洗礼を受けさせると、あごひげが男の子に生えず、女の子の方に生えることになると言われている。洗礼の水は顔から拭き取ってはならない。自然に乾くのに任せておくべきである。洗礼の水は、また、とっておいて後で子供に与えるとよい。その子供は素晴らしい歌声の持ち主になる。

イングランド北部地方では、洗礼での子供の泣き声は聖水によって追い出された悪霊の声であると言われている。

もし洗礼用の帽子をかぶっていたら、少なくとも12週間はかぶったままでいた方がよい。

子供を早く成長させたいければ、洗礼盤の上に高く持ち上げるとよい。

子供の幸運を保証するため、洗礼式が終わったらすぐに宴会を開くべきである。宴会は贅沢であればあるほどよく、飲み物も豊富にあった方がよい。「赤ん坊の誕生を祝って祝杯をあげる (wet the baby's head)」というよく知られた言い回しは、洗礼に付随するこのようななどんちゃん騒ぎに由来する。

1.4 誕生 (Birth)

ヨークシャー [イングランド北東部の旧州] では、

深夜に生まれた子供は生涯死んだ人の霊を見る能力を持つと言われていた。また、幸運を保証するために、新生児は誰よりも先に未婚の若い女性に抱いてもらうとよい。

幼児はウサギの足で擦ってあげると事故に会わずに済む。また、幸運がもたらされるように、赤ん坊は生まれたらすぐ、身体を洗う前にラードを塗りつけるとよい。

月が満ちる時に子供が生まれると、次に生まれる子供も同じ性になる。

ケント [イギリス南東部の州] では、男の子に女の子のねまきを着せ、女の子に男の子のねまきを着せると、後の人生で異性とのつき合いがうまくいくと信じられていた。

額に青い静脈が見えて生まれて来る子供は長生きしない。

妊婦が驚いたり、夢をたくさん見たり、不満があったりすると、子供はイチゴのあざをつけて生まれてくることになる。しかし、そのあざは母親が数日間なめてあげれば消えてなくなる。

母親はワインの入ったグラスの中に自分の結婚指輪を入れ、子供が生まれたら数滴飲ませてあげるとよい。そうすれば子供は病気や邪眼²から守られる。

子供の血色がよく健康であってほしいと願うなら、子供の顔を濡れたおむつで拭き、それをすぐに若い女性にあげるとよい。

赤ん坊の美しさを褒めてはいけぬ。うっかり褒めてしまったら、赤ん坊に唾を吐くか褒め言葉を撤回しなければならぬ。

赤ん坊のへそが治らなければ、主の祈り³を5回唱えながら鋤の刃を埋めるとよい。

マザーグースには、子供が生まれる順番について次のような歌がある。

First a daughter, then a son,

The world is well begun.

First a son, then a daughter,

Trouble follows after.

最初が娘で次が息子なら、世の中は順調。

最初が息子で次が娘なら、災難が続く。

日曜日は太陽の日であるとともに、キリストの復活の日であることから、誕生日として最も好ましいとされている。マザーグースには、生まれる曜日によって子供の特徴がどのように異なるかについて次のような歌がある。

Monday's child is fair of face,

Tuesday's child is full of grace,

Wednesday's child is full of woe,

Thursday's child has far to go,

Friday's child is loving and giving,

Saturday's child works hard for a living,

But the child that is born on the Sabbath Day Is blithe and bonny, good and gay.

月曜日生まれの子は器量がよく、
火曜日生まれの子は恩寵に浴し、
水曜日生まれの子は悲しみが多く、
木曜日生まれの子は遠くへ行ってしまい、
金曜日生まれの子は優しくて献身的で、
土曜日生まれの子は働き者だが、
安息日生まれの子は快活でかわいらしく、親切で陽気である。

1.5 花嫁 (Bride)

結婚する前の朝に花嫁は花婿に会うべきではない。会えば不幸な結婚になる。

結婚式の前日に花嫁の家でネコがくしゃみをしたら、それは幸福な結婚への前兆である。

結婚式の前に花嫁は花嫁衣装を一式すべて着用してはならない。また、教会へ行く前にすべてを着用して自分の姿を鏡で見るのは縁起が悪い。

結婚式の日には花嫁が号泣しないのは縁起が悪い。これは今日でも根強く残っている俗信の1つである。

教会へ向かう前、花嫁の衣装に1針加えると幸運をもたらされる。

花嫁の一行が結婚式へ行く途中で警察官、弁護士、聖職者、盲人に会うのは縁起が悪い。また、結婚式の後で花嫁がブタや葬列に出会うのも凶兆である。ただし、行く手を黒ネコ、煙突掃除人、ゾウが横切るのはよい前兆である。

教会の門で花嫁がロープか腰掛けを飛び越えたら、自分のベットとユーモアはすべて残していくことになる。

古い靴を履いて結婚した花嫁は幸運である。しかし、緑色の衣装を着て結婚する花嫁は不幸になる。

花嫁が持つ花束は性と多産を象徴し、幸せな結婚を保証してくれると言われている。また、花束に結びつけられたリボンには、花嫁の友人からの健康と幸福に対する願いや幸運を伝えてくれる。

新居に入る時、花嫁が玄関の昇り階段の上を歩くのは縁起が悪い。夫に抱きかかえられて入るべきである。この言い伝えはその起源が花嫁を略奪して結婚していた時代にまで遡る。

ヨークシャー〔イングランド北東部の旧州〕では、結婚の夜、花嫁が先に寝ついたら、必ず花嫁の方から先に死ぬと言われている。

マザーグースには花嫁が身につけるものについて次のような歌がある。

**Something old, something new,
Something borrowed, something blue.**

古いもの、新しいもの、
借りたもの、青いもの。

「古いもの」は持ち主に幸運をもたらしたのなら何でもよく、花嫁のガーター、室内履き、ハンカチが一般的である。「新しいもの」は将来への希望を象徴する。「借りたもの」は貸す人が幸福な時に身につけていたもので、いわば幸福のおすそわけである。地域によっては「盗んだもの」や「金色のもの」に取って代わられることもある。「青いもの」は、色のついたものは着てはならないという決まりに対する唯一の例外である。青には保護する力があるので、花嫁は嫉妬などの否定的なものから守られる。

1.6 花嫁付添人 (Bridesmaid)

今日では結婚式を飾るものとなってしまったが、花嫁付添人は、結婚式が始まる前に花嫁を奪おうとする恋敵から花嫁を守ることが本来の役目であった。

花嫁付添人が祭壇に向かう途中でつまづくのは縁起が悪いとされる。これは未婚で終わる運命にあることの印である。同様に3回付添人を務めるのも縁起が悪いとされる。さらに4回付添人を務めなければ結婚ができなくなる。

花嫁付添人の中に既婚女性がいると花嫁は幸運を引き寄せることができる。この女性が結婚生活の幸福を象徴すると考えられているからである。

花束が投げられた時、それを受け止めることができれば、その付添人には結婚が保証される。

花嫁付添人が結婚式の日にはピンを投げ捨てるのは幸運の印であるが、ピンに刺さるのは縁起が悪い。

1.7 埋葬 (Burial)

棺は常に太陽の運行と同じ方向、つまり東から西に向けて運び込まなければならない。そうしないと、生きている者と死んだ者の両方にとって縁起が悪い。

アイルランドとスコットランド高地では、教会の墓地や共同墓地に運び込まれた最後の死体が、次の死体が埋葬さえるまですべての墓を監視すると信じられている。

1.8 子供 (Children)

床をはっている子供の上を跨ぐのは成長が阻害されるかもしれないので凶兆である。また、巻尺で子供の背丈を測るのも成長の妨げになる。

1.9 棺 (Coffin)

死期を早めることになるので、生きている人は棺の中に横たわってもいけないし、自分の服を置いてもいけない。また、死体に生きている人の服を着せて埋葬してはならない。棺の中の服が朽ちていくにつれて、服の所有者の健康も害されることになるからである。

死者にとって最もよい衣装はその人の結婚の衣装である。これはすべての罪を洗い流してくれると言われ

ている。

子供の棺は玄関ではなく窓から外へ運び出さなければならぬ。また、子供の棺にはビー玉などのおもちゃを一緒に入れてあげるとよい。

棺を墓に入れることが難しければ、それは死者の魂が出ようともがいているか悪魔と最後の戦いをしているからである。また、もし棺が墓に入らなければ、その場にいる人全員にとって凶兆である。

動物は死者の魂を捕えるかもしれないので、棺を地面に置く時に近づけてはならない。

棺から取って寝室のドアに打ちつけた釘は悪夢を追い払ってくれる。

サマセット〔イギリス南西部の州〕やランカシャー〔イングランド北西部の州〕では、墓から掘り起こされた棺の金具から作られた指輪を身につけていると瘰癧が起きないと言われている。

1.10 死体 (Corpse)

ノーサンバーランド〔イングランド北東部の州〕とドーセット〔イングランド南部の州〕では、もし死体が何時間経っても暖かいままであれば、それは近いうちに家族にもう1人死者が出る印であると言われている。また、法的には意味をなさないが、よく知られた言い伝えに、死体を運ぶ時に通った土地は公道になるというものがある。

死んだら死体の目は閉じておかなければならない。さもないと、見る人を墓の中に連れて行こうとする。死者の魂を動揺させることになるので、死体の上に涙を落としてはならない。しかし、死体に触れるのは縁起がよい。触れることで死者が現れる悪夢を見なくてすむようになるからである。

スコットランドとイングランド北部地方では、もし動物が死体か棺の上を飛び越えたら、その動物を追いかけて殺さない限り家族に災難が起こると言われている。

サセックス〔イギリス東南部の旧州〕では、もし死体が日曜日に埋葬されていなければ、1週間もしないうちに村人の中にもう1人死人が出ると信じられている。

船乗りは船上に死体があるのは縁起が悪いと考えている。また、死体を海に沈める時、船乗りは波間に消えていくところを見ようとしない。見ると、すぐに自分もその仲間になると考えているからである。

死体は足から先に運び出すことが重要である。そのようにすれば死者が幽霊になって戻ってくることはない。死体が畑の上を横切ると、その畑はその後どんなに肥沃であったとしても不毛になる。死体が家から運び出されたら、残っている悪運の痕跡を取り除くため、玄関の上り階段をすぐに水で洗った方がよい。

1.11 揺りかご (Cradle)

一般的に、空の揺りかごを揺らすと1年以内に別の赤ん坊が入ることになると言われている。しかし、イングランド北部地方では、空の揺りかごを揺らすと最後に入っていた赤ん坊が死ぬと信じられている。北部地方では、また、負債の未納のために財産を差し押さえられても、揺りかごだけは残しておかなければならないと言われている。揺りかごの差し押さえは執行吏に悪運をもたらすからである。

1.12 死 (Death)

病人もしくは病人の親族のベッドの上部で3回大きなノックの音がしたら、死がすぐに訪れることになる。デヴォン〔イングランド南西部の州〕では、胸の白い鳥が現れるのは死の確かな前兆であると言われている。

ウェールズでは、棺衣が棺の間違った側に置かれると家族の中にもう1人死人がでると言われている。ウェールズでは、また、風で教会の祭壇の蠟燭が消えたら牧師がすぐに亡くなると信じられている。洗濯所や搾乳場の下に穴を掘ったモグラを見つけたら、家の女性が翌年のうちに亡くなるという言い伝えもある。

ハトの羽毛が入ったマットレスが敷かれたベッドの上で死にかけている人は、シーツで持ち上げて床の上に寝かせてあげないとひどい死に方をすることになる。

ケント〔イングランド南東部の州〕とノーサンプトンシャー〔イングランド中部の州〕では、ハトの羽毛の上では誰も死なないと信じられている。

死の前兆となる動物の行動に、理由もなくイヌが開いたドアに向かって吠える、雌鶏が黄身の2つ入った卵を産む、魚が水中から引き揚げられた時に奇妙な音をたてるなどがある。また、カラスやフクロウが家の近くに飛んできたら、それは死を暗示している。シェイクスピアの『ジュリアス・シーザー (Julius Caesar)』(第1幕第3場)の中で、シーザー暗殺の共謀者の1人であるキャスカは、暗殺の前々日、フクロウが鳴くのを聞いたと発言している。

Yesterday the bird of night did sit,

Even at noon-day, upon the market-place,

Hooting and shrieking.

それに、きのうは、夜の鳥が、真昼間だというのに、広場に舞い降りて、たえず鳴きたてていたそうだ。⁴

シバンムシ (death watch beetle) は、家の中でコツコツ叩く音が死を暗示することから、その名がついたと言われている。しかし、実際には、その音は仲間を呼ぶ音である。

家の中の鍵が掛けられている、あるいは、かんぬきが開けられている限り人は死ぬことがないと言われている。また、死が近づいたら、

- ・死者の魂が通り抜けることができるように家のすべての窓とドアを開けておく。
- ・魂が混乱しないように鏡は壁の方に向きを変えておく。
- ・すべての結び目をほどいておく。
- ・旅立ちの邪魔になるので死者の足元には立たない。などの措置を取るべきである。

葬式まで死者に対してしばしば寝ずの番がなされるが、これは死者を1人にさせないためと、悪霊が死体に手を出すことを防ぐためである。また、死者の魂が暗闇に脅えることがないように蝋燭が灯される。

海辺に住む人たちの間には、潮が引くまで人は死なないという言い伝えがある。

死が広まらないように死者の洗濯物は他の家族と分けて洗わなければならない。また、死者の魂が旅立つ前に食事ができるように1人分の食器を用意すべきである。

死者の悪口を言ってはならないという言い伝えはローマ時代にまで遡る。これは死者を憤慨させ、幽霊になって戻ってくるかもしれないという恐れから始まったとされる。

1.13 婚約 (Engagement)

婚約、つまり結婚するという計画の発表は予想以上に俗信に満ちている。例えば、結婚指輪に使われる宝石には運に違いがあり、ダイヤモンド、エメラルド、ルビー、サファイアは幸運をもたらすが、真珠は涙を象徴するので縁起が悪いと見なされている。オパールも縁起が悪いと考えられているので、もしはめる人が10月生まれでなければやめた方がよい。

結婚指輪のサイズが指に合わず、調整してもらわなければならないのは不吉である。結婚前に指輪をなくしたり壊したりしてしまうのは特に不吉である。花嫁となる人の友人が結婚指輪を指先にはめて願い事をするのは認められているが、薬指に完全にはめてしまうのは縁起が悪い。

アメリカ合衆国では、結婚指輪を購入する曜日が結婚の成否の前兆になると言われている。月曜日なら、2人は波瀾に富んだ人生を送ることになる。火曜日なら、仲睦まじく暮らすことになる。水曜日なら、夫婦喧嘩をすることはない。木曜日なら、望みがすべてかなうが、金曜日なら、あくせく働いてやっと報われることになる。土曜日なら、2人で楽しく暮らしていける。

プロポーズする場所も重要であり、公共の場所や電車やバスなどの公共交通機関で移動している時にプロポーズするのは禁物である。また、女性はダンスパーティーで結婚を申し込まれて断ったとしても、意外な理由から幸運に恵まれることになる。

婚約中のカップルが一緒に写真を撮ったら婚約は破

談になるという。また、イギリスでは、婚約中のカップルが教会で自分たちに結婚予告を聞くのは縁起が悪いとされる。

よく知られた言い伝えによると、万が一娘の決心が変わった場合は、求婚者にナイフを贈れば婚約を破棄できるとされる。結婚と同様、婚約は1回だけでなければならない。2回すると地獄に行くことになり、3回すると魂を悪魔に奪われることになる。

1.14 葬式 (Funeral)

悪魔は黒い色が見えないため、葬式に参加する人は悪魔の目をくらすために黒い服を着用すべきである。

葬式の間にも雨が降るのは死者の魂にとって幸運であると考えられている。マザーグースには次のような歌がある。

Happy is the bride that the sun shines on,
Happy is the corpse that the rain rains on.

日の光を浴びる花嫁は幸せ、
雨が降り注ぐ死体は幸せ。

どんな理由であれ、葬式を遅らせるのは不吉である。遅延が1週間にも及ぶのは特に不吉で、死者が連れて行く相手を探し始めることになる。また、日曜日や正月に葬式を行うのも不吉である。

棺は頭を先にして家から出さなければならない。また、棺を担ぐ人は死者と同じ職業か同じ地位の者である方がよい。

葬式の間、家のドアの1つは開けておかなければならない。さもないと、葬式から帰ってきた後に家族の間でひどい争いが起こる。

葬列が一旦始まったらぐずぐずしてはならないし、中断してもならない。さもないと、死者の魂が逃げ出して生きている者に取りつく機会を与えることになる。

葬列が近くを通り過ぎるのを見る人はひざまずいて頭を垂れ、男性は帽子を取らなければならない。

スコットランドとイングランドの国境地帯では、会葬者の1人の顔に日の光が明るく降り注いだら、それはその人が次に亡くなる前兆であると信じられている。

アメリカ合衆国では、葬列の中の車の数を数えるのは危険であると考えられている。その数は数えた人の残された寿命の年数を表すことになるからである。アメリカ合衆国では、また、(有名人の場合は別として)特に誘われなければ葬式に参加するのは縁起が悪いと信じられている。さらに、棺が墓にうまく収まらなければ、会葬者全員に不幸がもたらされると言われている。

葬式の後、死者に向けられた敬意に対して感謝を表すため、会葬者に食事がふるまわれなければならない

い。また、葬式から戻ったら、会葬者は全員、死者の家で手を洗った方がよい。

1.15 墓地 (Graveyard)

新しい墓地に掘られた最初の墓に納められる死体は悪魔に要求されるという。

南風が腐敗をもたらすという古代の俗信のため、教会の南側は最も神聖な場所であると見なされてきた。そのため、人々は何世代にもわたって南側に埋葬されることを希望してきた。一方、北側には自殺した人や死産の赤ん坊だけが埋められた。

最後の審判の日には、東から呼び出しがかかると言われている。そのため、墓は常に東から西に向けて掘り、死体は頭が西で足が東になるように置かなければならない。

墓の上、特に洗礼を受けなかった人の墓の上を歩くのは縁起が悪い。

死体が埋められたことのある土地を掘ったり耕したりするのは不吉であり、そこに植えられた植物はよく育たない。

墓石を使って新しい建物を建てると、必ず崩壊を招くことになる。また、墓の欠片を使って道路を建設すると、使った場所で事故が多発することになる。

1.16 霊柩車 (Hearse)

多くの人にとって霊柩車を見たり追い越したりすることは特に意味を持たない。しかし、近づいてくる霊柩車に偶然出会うことは縁起が悪いとされる。もし霊柩車が空であれば特に縁起が悪い。その車に乗せる人を探していると考えられるからである。

1.17 ハネムーン (Honeymoon)

古代、蜂蜜は豊穡と性的能力の象徴と見なされていたので、今でも媚薬としての効果があると信じている人たちがいる。かつて新婚夫婦は結婚後30日間、つまり月がその位相 (phase) を一巡する間、毎日蜂蜜酒 (ミード) か蜂蜜入りの飲料を飲むことになっていた。そのため、その期間が「蜜月 (honeymoon)」と呼ばれるようになった。

婚礼の夜は花婿が入口の戸締りをしなければならない。もし花嫁がすると、2人は夜の間に夫婦喧嘩をすることになる。

1.18 愛 (Love)

恋人と話している間に女性がテーブルの上に腰掛けたら、その女性は結婚できなくなる。また、朝食前、家を出る時に北を見なかった女性は未婚のまま終わることになる。

愛する2人が月桂樹の枝を取って半分に折り、それぞれが1本ずつ保有していれば、愛が衰えることはな

い。

未来の夫となる人を知りたいと思う女性は、聖ヴァレンタインの日の前夜に墓場に行き、時計が12時を告げたら、教会の周りを走りながら次のように言うとい

I sow hempseed, hempseed I sow.

He that loves me come after me and mow.

麻の種を蒔いたわ。蒔いたわ、麻の種を。私を愛する人が後からやって来て刈り取ってくれる。すると未来の夫が現れるという。

デヴォン [イングランド南西部の州] では、男性の墓からノコギリソウ (yarrow) を摘み取って夜それを枕の下に置けば、夢の中に恋人が現れると言われている。

1.19 ラブレター (Love Letter)

金曜日は愛の女神であるビーナスによって支配されているので、この日はラブレターを出すのに最良の日である。

ラブレターは常にインクで書かなければならない。鉛筆で書いたりタイプしたりするのは凶兆である。

ラブレターは決して日曜日、12月25日、2月29日、9月1日に投函してはならない。

ラブレターを書いている時に手が震えたら、それはお互いに愛し合っている印である。また、紙にインクが滲むのもよい知らせである。それは愛する人が同じ時にあなたのことを想っているからである。

ラブレターを受け取った時に、破れていたり消印が不適切に押されていたら、それは不運の前兆である。

恋人が誠実であるかどうか知りたければ手紙の1つに火を点けてみるとよい。炎が明るくて高ければ愛は続くが、弱く青白ければすぐに破局が訪れる。

ラブレターを処分する時は、焼くよりも破く方がよい。

1.20 結婚 (Marriage)

6月は結婚にとって理想的な月と考えられている。これは6月がジュピターの貞節な妻であるユノにちなんで名づけられていることに由来する。ユノは女性と結婚の守護神であり、この月に結婚する者に特別な恵みを与えると信じられてきた。

次のような兆候のいずれかが見られたら、家族の中に結婚話が持ち上がることになる。

- ・階段を上っている時につまずいた。
- ・暖炉で燃えている石炭の燃えさしが足元まで飛んできた。
- ・目の前で偶然ティースプーンが2本受け皿に置かれた。

7夜連続で7つの星を数えたら、8日目に最初に握手をした異性が未来の伴侶となる。

タンポポの綿毛の球を吹き、残った綿毛の量を見ることで相手が自分のことをどのくらい思っているのかを知ることができる。

ヨークシャー〔イングランド北東部の旧州〕では、結婚式の日違ったドアから出入りしないよう注意された。さもないと常に悪運に見舞われると考えられていた。

1.21 名前 (Name)

子供に死んだ兄弟にちなんで名前をつけるのは縁起が悪い。その子供も同じ運命を辿ることになるからである。また、子供に家のペットと同じ名前をつけるのも縁起が悪い。その動物に起こる不運がその子供にも影響を及ぼすからである。しかし、子供に聖人や殉職者や有名人にちなんで名前をつけるのは、その人の加護が保証されることになるので、縁起がよいとされる。また、有名人にちなんで名づけることも、その人の運の一部を手に入れることになるので、縁起がよい。

イギリスには、アグネス (Agnes) という名前の人は決まって気がおかしくなり、ジョージ (George) という名の男の子は (史実に反して) 決して絞首刑に科せられないという奇妙な俗信が存在する。

名前の文字数も重要で、7文字は非常に幸運であるが、13文字は縁起が悪い。

洗礼を受けるまで、子供の名前が何であるのかを肉親以外の人に教えてはならない。悪霊がその名前を呪文に使って害を及ぼすかもしれないからである。

婚約中の女性は結婚するまで結婚名を使ってはならない。さもないと婚約が破談になる恐れがある。

チェシャー〔イングランド西部の州〕では、同じ姓の男性を続けて夫に持った女性は、バターつきパン (bread and butter) を切って患者に与えるだけで百日咳などの病気を治す力があると信じられている。

船の名前を変えるのは遭難の危険が高まるので縁起が悪いと考えられている。また、aの文字で終わる名前の船は不吉であるとされる。

1.22 妊娠 (Pregnancy)

胎児と9カ月の妊娠期間にいる妊婦に降りかかる害を避ける方法について多くの俗信が存在する。一般的に信じられている言い伝えに、妊婦が編み物や糸紡ぎをすると子供がいつの日か絞首刑に科せられるというものがある。また、妊婦は墓の上を歩いてはならないと言われている。さもないと子供が若死にすることになる。

妊娠中に妊婦に起こることや妊婦が行うことは生まれてくる子供の心と身体に重大な影響を与えると考えられている。例えば、

- ・妊婦が月を見つめると精神的に問題のある子供が生まれてくる。

- ・妊婦が野ウサギを見ると子供が三つ口で生まれてくる。

- ・妊婦がイチゴを欲しがっていると子供は身体にイチゴのあざをつけて生まれてくる。

などと言われている。また、生まれてくる前に公然と子供の話をすることは危険である。胎児に危害を与えようとする妖精たちを引き寄せることになるからである。さらに、もし妊婦が妊娠中に盗みを働くと子供は大きくなってから泥棒になるという。知的な子供が欲しければ、妊婦は妊娠中に学術的な本をできるだけ多く読むとよい。

妊娠中に特定の色の服を着ることで、男女の産み分けができると信じられている。もし男の子が欲しければ青い服、女の子が欲しければピンクの服を着るとよい。アメリカ合衆国では、腹の中にいる子供が子宮の右側を蹴れば男の子、左側を蹴れば女の子であると言われている。また、子供の健康が保証されることから、太陽が最も高い位置にくる正午に妊娠するのが最もよい。

1.23 双子 (Twin)

双子は神と人間の結合の結果であるので、千里眼や治癒力といった特殊な能力を持つと信じられている。また、双子は2人で1つの魂を分かち持っていると言われていた。

双子になる理由については、一般的に、妊娠中に対するフルーツを食べたからであると考えられている。また、妊婦の夫がうっかりコショウをこぼしたら、自分の肩越しにコショウを撒かないと双子が生まれるという言い伝えがある。さらに、妊婦のおなかの真ん中より下に赤い筋があったら双子を生むと信じられている。あまり喜ばしくない俗信として、男性は1度に1人の子供の父親にしかねないので、2人目は母親の不倫か、神もしくは精霊の干渉の結果であるのに違いないというものがある。

ドーセット〔イングランド南部の州〕では、双子の1人が亡くなって死後硬直が起こらなかつたら、それはもう1人を待っているからであると言われている。

双子がもし同じ日に結婚するなら、違う教会を使う方がよい。

1.24 ウェディング・ケーキ (Wedding Cake)

結婚式の特徴となっているウェディング・ケーキは豊穡と幸運を象徴する。そのためケーキは豪華でおいしくなければならない。もしケーキ作りに失敗すると結婚も失敗に終わることになる。花嫁がケーキ作りに参加するのは大変縁起が悪いとされる。また、花嫁は結婚式の日より前に味見してはならない。さもないとすぐに夫の愛を失うことになる。

花嫁が花婿の助けを借りてケーキの最初の一切れを

切るという習慣は、これからすべてのものを2人で分かち合うことを表している。もし花婿が1人で切ると子供に恵まれなくなる。

夫が忠実であり続けることが保証されるので、花嫁はケーキの1切れを自分のためにとっておくべきである。また、子供が多く生まれることが保証されるので、花嫁はケーキの1段目を未来の洗礼式のために取っておくとよい。披露宴に出席した客は出されたケーキの小片を食べなければならない。断ると新婚夫婦だけでなく自分自身にも悪運がもたらされることになる。客の中の未婚女性はケーキの1切れを持って帰り、それを枕の下に置いて寝ると未来の夫の夢を見るという。

1.25 結婚指輪 (Wedding Ring)

昔から結婚指輪は男女の和合を表し、円形は永遠の愛を象徴してきた。左の薬指に指輪をはめるのは、古代エジプト人がこの指から心臓に愛の血管がまっすぐ通っていると考えたことに由来する。

結婚式の間に指輪を落とすのは不吉であり、落とした方が先に死ぬことになる。落とした指輪は、式を執り行っている聖職者に拾ってもらわなければならない。

1度はめた結婚指輪は第1子が生まれるまで外してはならない。また、指輪がなくなったり壊れたりするのは凶兆である。災いを避けるため、配偶者にできるだけ早く代わりの指輪を買ってもらい、はめながら誓いの言葉を述べなければならない。

2. 左側・右側と太陽回り、時計回り

2.1 左側 (Left Side)

左側は悪魔や悪霊の住処と考えられてきた。左側を表すラテン語が *sinister* であることからわかるように、左側が不吉であるという考え方はローマ時代にまで遡る。この俗信は、うっかり塩をこぼした時に、なぜ左肩越しに塩をまくのかを説明してくれる。そのような過ちを犯した後では悪魔に襲われる危険があるからである。悪魔は左から、そして卑怯にも後ろからも攻撃してくる。

左側に対する否定的な態度は人口の8~15%を占める左利きの人々に大変な問題を引き起こしてきた。彼らは悪魔や悪霊と何らかの関係があると見なされてきたからである。

黒魔術は人々に危害を与える、あるいは、意思に反した行いを強いる有害な魔術であることから、不吉な道 (*left-handed path*) とも呼ばれている。

ドラム [イングランド北東部の州] では火曜日の朝に左利きの人にあるのは不運であるが、火曜日以外の曜日の朝に会うのは幸運であると言われている。この俗信は北欧神話に登場する戦争の神ティーウ (Tiw) と関係している。ティーウはオオカミの姿をした怪物の

フェンリル (Fenrir) を封じ込めるために右腕を捧げた英雄であるが、その名が現代英語の火曜日 (Tuesday) の語源になっている。

アメリカ合衆国では、左利きの人に右手を使えるようにさせると、どもるようになると言われている。

2.2 右側 (Right Side)

昔の人々は、神が人間の右側に住み、悪霊が人間の左側に住むと信じていた。また、右回りは太陽が進む向きを象徴し、左回りは悪魔や魔女が好む向きであると信じていた。そのため、寝る時はベッドに左側から入り、目覚めたら右側から出ていかなければならないと考えた。

現代でも多くの人々は旅や結婚などを始める時には右足から踏み出すとよいと信じている。そうすることで、幸運がもたらされ、成功へと導いてもらえると考えられているからである。

2.3 太陽回り、時計回り (Sunwise)

重要な儀式を執り行う際に、太陽の運行と同様に、東から西 (つまり、時計回り) に回るという習慣は非常に古く、古代の太陽崇拝に起源がある。太陽が地上のすべての生命と繁殖の源であると考えられていたからである。逆に、反太陽回り (つまり、反時計回り) に進むことは闇に力を増大させ大変な不幸を招くと恐れられていた。そのため、その起源が忘れられた今日でも、ワインは食卓で時計回りに回すことが慣習となっている。また、主婦の中には鍋の具材は時計回りにかき回さないと料理がだめになると信じている者がいる。さらに、多くの漁港では、漁のために出港する時は、大漁と無事の帰還を願って時計回りの航路を取るか時計回りに3回転する。

おわりに

本稿では、英米に伝わる俗信の中から、特に「人生」および「左側・右側と太陽回り、時計回り」にまつわるものを取り上げて、その起源と内容を明らかにした。

注

- 昔から、悪魔の目すなわち邪眼を持つ人たちがいて、そのような人たちは、じっと見つめるだけで他人の健康や運命を悪化させることができると信じられてきた。特に、色違いの目、くぼんだ目、寄り目、やぶにらみの目を持つ人たちは邪眼の持ち主であるとして告発されてきた。
- 注1を参照。
- キリストが直接弟子たちに教示した祈り。「マタイによる福音書」第6章第6節から第13節と「ルカによる福音書」第11章第2節から第4節に記録され、「我らの父よ (Pater noster)」と祈る共同体としての基本的祈りである。したがって、初

代教会以来、マタイによる福音書に基づいて、すべての典
礼、聖務日課、礼拝、特に聖餐に必須の祈りとして繰り返
し唱えられてきた。(日本キリスト教歴史大事典編集委員会
『日本キリスト教歴史大事典』p. 664を参照。)

- 4 『ジュリアス・シーザー』福田恒存訳、新潮文庫より引用。

『リルからカレワラまで』ソフトバンク クリエイティブ株
式会社、2010。

(2014年9月18日受理)

参考文献

俗信・迷信関連

- Batchelor, J. F. and C. de Lys. *Superstitious? Here's Why!*, New York:
Harcourt, Brace and Company, Inc., 1954. 『アメリカの迷信さ
まごま』横山一雄訳、北星堂書店、1962.
- Braysher, C. M. *Collins Gem Superstitions*, London: Harper Collins,
1999.
- Lasne, S. and A. P. Gaultier. *A Dictionary of Superstitions*. New Jersey:
Prentice-Hall, Inc., 1984.
- Lys, C. de. *A Treasury of Superstitions*. New York: Gramercy Books,
1996.
- Oliver, H. *Black Cats and April Fools*. London: John Blake Publishing
Ltd, 2006.
- Opie, I. and M. Tatem. *Oxford Dictionary of Superstitions*. Oxford:
Oxford University Press, 1989. 『英語 迷信・俗信事典』山形
和美監訳、大修館書店、1994.
- Pickering, D. *Cassell Dictionary of Superstitions*, London: Cassell,
1995. 『カッセル英語俗信・迷信事典』青木義孝・中名生登
美子訳、大修館書店、1999.
- Potter, C. *Touch Wood: An Encyclopaedia of Superstition*. London:
Michael O'mara Books Ltd, 1990.
- Radford, E. and M. A.. Radford. *Encyclopaedia of Superstitions*, Lon-
don: Hutchinson, 1975.
- Rhodes, C. *Black Cats and Evil Eyes: A Book of Old-Fashioned Super-
stitions*. London: Michael O'Mara Books Ltd, 2012.
- Roud, S. *A Pocket Guide to Superstitions of the British Isles*. London:
Penguin Books Ltd, 2004.
- Roud, S. *The Penguin Guide to the Superstitions of Britain and Ireland*.
London: Penguin Books Ltd, 2006.
- The Diagram Group *The Little Giant Encyclopedia of Superstitions*,
New York: Sterling Publishing Co., Inc., 2008.
- Waring, P. *A Dictionary of Omens and Superstitions*, London: Souvenir
Press, 1978.
- Zolar *Encyclopedia of Signs, Omens and Superstitions*, London: Souve-
nir Press, 1990.
- 小泉直「英米の俗信 (1)」『愛知教育大学研究報告』第61輯 (人
文・社会科学編) (2012) : 43-50.
- 小泉直「英米の俗信 (2)」『愛知教育大学研究報告』第62輯 (人
文・社会科学編) (2013) : 53-61.
- 小泉直「英米の俗信 (3)」『愛知教育大学研究報告』第63輯 (人
文・社会科学編) (2014) : 83-91.
- 東浦義雄・船戸英夫・成田成寿『英語世界の俗信・迷信』大修
館書店、1974.

英米文化・ヨーロッパ文化関連

- 白石拓『薬指でわかる遺伝子の暗号』宝島社、2013.
- 日本キリスト教歴史大事典編集委員会『キリスト教歴史大事典』
教文館、1988.
- 森瀬繚・静川龍宗『「北欧神話」がわかる オーディン、フェン